

# わたしたちがみた 当世美術館事情 4

09 年度美術館調査報告書

## Contents

はじめに 福のり子	3
調査対象美術館一覧	8

### 第1章 いってみよう美術館

1 美術館に辿り着くまで 金璘 江藤由衣	16
2 誰にとっても美術館!? 金澤咲 郭潤夏 仁科泰生	44
3 美術館の建築 金田彩希	76

### 第2章 ひらいてみよう美術館

1 美術館の収蔵作品とそれに関わる活動 長谷川麗 河原一樹	112
2 美術館と人をつなぐ刊行物 荒井美礼 東佑亮	150

### 第3章 みなおそう美術館

1 美術館評価の比較調査 中山陽介	176
-------------------	-----

### 第4章 ともにつくろう美術館

1 ともにつくる美術館をめざして 渡川智子	200
-----------------------	-----

インターネット座談会	216
おわりに 山下里加	229
美術館調査 紹介記事	230
バックナンバーのご案内	231

## はじめに

『わたしたちがみた当世美術館事情』は、京都造形芸術大学芸術表現アート・プロデュース学科(ASP学科)の2回生と3回生が、1年間取り組んできた美術館に関する調査をまとめた報告書です。

本学は芸術系の大学ですが、ASP学科の学生たちは、いわゆる「制作系」ではありません。彼らはいかにすれば「アート」を、社会や生活のなかで活かしていけるかという課題に、研究や実践を通して取り組んでいます。しかし、そんな彼らも入学当初は「アート」という言葉を聞いても、「作品」や「アーティスト」といった限られたイメージしか浮かばなかったようです。1年を本学で過ごす間に、美術の世界にはもっとたくさんの種類の活動や職業があることを彼らは学んでいきます。「美術館」もそのひとつです。学生にとって、美術館は学びの場であり、活動の場であり、そして将来の就職先となるかもしれない大切な場所なのです。その美術館の活動と現状をもっとよく知り、問題点や存在意義についてしっかりと考えてもらいたいと願って始めたのが、この「美術館調査」です。

本調査も、今年で4年目になり、毎年の終わりには報告書を出版しています。『わたしたちがみた当世美術館事情4』と題された今年の報告書は、「いってみよう美術館」「ひらいてみよう美術館」「みなおそう美術館」という3つの章と第4章の「特別寄稿」から構成されています。各章に収められた合計6つの調査テーマは、学生の素朴な好奇心や興味あるいは疑問から出発したものです。

一昨年の調査報告書に掲載した「街角で聞いた美術館のイメージ」を読み、美術館に行ったことがない、あるいはほとんど行かないと答えた人が43%もいたことに驚いたふたりの学生は、「美術館に辿り着くまで」というテーマで調査を行いました。ひとりでも多くの人たちに、美術館に辿り着いてもらいたいと願ってのことです。調査途中、美術館のホームページでアクセス情報を調べるだけで、いったい「美術館について何がわかるのか?」と悩んだ彼女たちですが、美術館が「どれほど(来館者に)来てもらいたいと思っているかがわかってきた」と、本報告書の最後に掲載した「座談会」で述べています。彼らは、「自転車」でやってくる人々のためのアクセス情報が少ないことに驚いています。「運賃」のかからない自転車をフルに活用する、「自転車サイズの街」京都に住む、学生ならではの発想だといえるでしょう。

バリアフリーについて調べたいと言った学生たちは、調査を始める前に、まず自らが車椅子で展覧会をみに行きました。彼らが各地の美術館に送ったアンケートの問いに対して、ある美術館から「障害者に合わせると、健常者が使いづらくなるから配慮しない」という回答をいただきました。当初は、その回答に納得した学生たちですが、考察を重ねて行くうちに、様々な事柄について自問し始めます。たとえば、「障害者には入場割引制度を導入しながら、その人たちがきちんと展覧会を見られないということでもいいのだろうか?」

ミュージアムの語源は、古代ギリシャの芸術の女神(ミューズ)の神殿、ムセイオンから来ていると言われています。ムセイオンは特権階級の人々のためだけの研究機関でもありました。それから年月を経て現在、美術館はもっとオープンな場となっています。しかし将来は、さらに「開かれた」場になってもらいたい、あるいはそういう方向にむかって「拓く」努力をしてもらいたいと、彼らは望んでいます。

「建築を見るのが好きだ」というだけの理由で、テーマを決めた学生もいます。彼女は、日本が世界に誇る著名建築家たちが設計した建物を、「働き易さ」という角度から点数をつけて評価しました。辛口のコメントまで書かれたこの評価に、「世間の大人」である私たち教師は少々たじろいでいますが、なかなか興味深い内容になっています。

「美術館の目玉作品が知りたい!」と言ってきた学生は、美術館の主要収集作品について調査しています。「目玉」という言葉はバーゲンセールみたいで、本報告書に使用するのが適切かどうか、当初はためらいがありました。しかし、固い言葉よりも「目玉」の方が、「生活感」と「熱気」のようなものが感じられるかもしれないと、この学生から最初にでた言葉をそのまま用いることにしました。

将来、グラフィック・デザイナーになりたいと願っている学生がいます。自らの夢を、どのようにすれば「美術館調査」と結びつけられるのかと考えた末、美術館が発行している刊行物に注目しました。このグループの学生たちは、「刊行物は、美術館と人をつなげるための架け橋」だと語っています。

「文化行政について語れるようになったら格好が良いかな」という、少々短絡的な動機で始めた学生は、「美術館評価の比較」に取り組みました。美術館からの回答を目の前に、途方に暮れていたこの学生は、「知っている気分と実際に調べてみるでは、全然違った」と言っています。「評価」の奥深さに気付いた彼は、美術館をより良くするのに「魔法の薬はあらへん。大切なのは目的と、小さなことからのコツ

コツ精神や」と、まるで自らを省みるかのように、「座談会」で述べているのが印象に残ります。

この授業は4月、過去に出版された3冊の調査報告書をすべて読むことから始まります。先輩たちの力作を読んだ直後、学生たちは「こんな大変な授業、とらなきゃ良かった…」と後悔したり、「私にはこんなこと絶対できない」と、不安げな顔をしていました。ところが、調査が終了するころには、このようなことを言うまでに成長します。「作品は『モノ』じゃなく、『コト』を起こすための素材だ。そして美術館は『コト』を起こす装置なのだ。」

同時に、彼らにとって美術館はとても身近な場所になっていくようです。調査対象となった多くの美術館の中から、各自が最もすばらしいと思う美術館について、「座談会」で熱く語っています。

「静岡県立美術館はスゴイぞー!!」

「兵庫県立美術館はがんばっていると思います」

「私が勤める美術館は、浦添市美術館!なんたって、建築様式が『多国籍風』ですから。」

「高知県立美術館もすごいよ!バリアフリーでのソフト面の点数も、アクセス調査の点数も高いんですよ!」

本報告書の第4章には、「特別寄稿」として、ある4回生の卒業論文を掲載しました。「『ともにつくる』美術館を目指して―棚橋源太郎の理論及び現状から考える美術館の存在意義と教育活動の関係―」と題されたこの論文は、筆者である学生が昨年度に行った美術館調査をベースに、日本の美術館における教育普及活動を、歴史的側面から考察したものです。昭和初期にすでに、博物館を「誰に対しても自由に開かれており、あらゆる過ごし方ができる教育機関」とであると唱えた、棚橋源太郎(1869-1961)という人物がいたことに、この学生は驚きと賞賛をもって、彼の理論と実践を紹介しています。この論文は、以下の言葉で締めくくられています。

来館者一人一人が美術館という場所で、能動的に作品や空間や人々と関わり、発見や学び、想像やコミュニケーションを生み出してゆく。そこで働く人だけではなく、そこに来館する人々たちと「ともに」美術館という場所をつくり上げてゆく。そうすることではじめて、美術館は単なる「ハコ」ではなく、無限の可能性をもった、生きた空間となるのだ。自覚を持って、積極的に美術館に接していくこと。この意識が美術館の存在を変えていくのである。

最後になりましたが、本美術館調査にご協力いただきました、すべての美術館関係者の方々に心からお礼を申し上げます。大変お忙しい中、これほどたくさんの、そしてときには答えにくい、あるいは不躰な質問をも含んだアンケートを受け取られ、お困りになったことと存じます。それにもかかわらず、たくさんの美術館から丁寧な回答をお寄せいただきました。本当にありがとうございます。追加調査をお願いした学生たちに、快くお返事を下さった美術館もあります。

皆様にお送りしたアンケートを作成するだけで、学生たちは4ヶ月を費やしました。自信を持って送付したアンケートではありましたが、回収し、いざ分析に入るといくつかの不備がみつかりました。これは、指導教員の不徳の致すところであります。お忙しい中、時間をかけてお答えいただいた美術館の皆様には、このような問題が生じたこと、心からお詫びを申し上げます。

これらの調査は、突っ込みどころ満載の、まだまだ未熟な調査です。しかし、ある意味で、学生だからこそできた、『わたしたちがみた当世美術館事情』だと言えると思います。来年もまた調査を続行いたします。どうか、これに懲りられず、今後ともご協力をいただけますよう、何卒、何卒よろしく願い申し上げます。

福 のり子

京都造形芸術大学 芸術表現アート・プロデュース学科教授  
アート・コミュニケーション研究センター代表

# 現代のことは

福ふくのり子こ



『わたしたちがみた当世美術館事情』がようやく完成した。これは私が教えている大学の芸術表現アート・プロデュース学科の二年生を中心とした学生が、一年間取り組んできた調査報告書だ。この学科の学生たちは、いかにすれば、社会や生活のなかで「アート」を活かしていけるかを学んでいる。そんな彼らにとって美術館は学びの場であり、活動の場であり、将来の就職先となるかもしれない大切な場所。その美術館の活動を知り、問題点や存在

意義について考えてもらいたいと始めたのが、「美術館調査」だ。三年前から毎年行っているこの調査のテーマは、学生たちが独自で考える。「自らの経験から見た、素朴な疑問をテーマに」とアドバイスすると、彼らは美術館への期待や不満、あるいは将来の夢などを語り始める。「母国に帰って学芸員になりたい」と願う韓国の留学生、「美術館に置いてあるアンケートに答えたくない」と告白する学生。「館長さんには、一度も会った

## わたしたちがみた当世美術館事情

ことがない」と言い出す学生もいた。こういった彼らのふともうひとつの背景がある。きっかけは素朴でも、調査を進めていくうちに、彼らはいくつもの壁にぶちあたり、悩み、そしてなにかを学んでいく。「入館料」について調査した学生グループは、「貧乏学生にとって、入館料は高いから」と、このテーマを選んだ。しかし彼らは、「国によって、なぜこんなに入館料が違うのか?」という疑問にぶちあたったのだ。気がつく

と、夜を徹して、世界七カ国もの文化行政や文化支援について調べていた。教育普及をテーマにした学生は、彼らのアンケートに返答のあった美術館のうち、半数もの館が「普及活動を開始してから

来館者が増えた」と答えていることを見いだした。将来、美術館で教育普及の仕事に就きたいと願うこの学生は、満面の笑みを浮かべて「発見」を私に報告してきた。「館長」について調査した学生たちには、返送されてきたアンケートに思いがけない言葉が添えられていた。「直接会って話しましょう」。京都国立近代美術館館長からの言葉だ。学生が行った館長インタビューも、報告書に掲載した。一年間の調査を通して学生たちは、美術館と「人」について学んだようだ。いかに潤沢な資金があり、すばらしい建物や収集品があっても、それらを「人々」のために、より有効に活用しようとする「人」がいなければ、単なる「ハコ」や「モノ」になってしまう。作品を収集、保存、展示するために生まれた美術館。しかし現在では「人々」が作品を通してさまざまな価値観を発見し、見直しをしていく場」と言われている。「モノ中心」から「ヒト中心」へと変化したのだ。『わたしたちがみた当世美術館事情』は、学生の視点からみた報告書にすぎないかもしれない。しかし、これを続けていくうちに、外からではわかりにくい美術館の姿がみえてくるのではないか。あるいは、内側にいるからこそみえにくかった美術館像を、関係者に伝えることも可能かもしれない。というわけで、来年もまた調査を続行いたします! (京都造形芸術大学教授・美術教育)

## おわりに

### 「私たち自身が何を望んでいるのかを考えること」

本年度も『わたしたちがみた当世美術館事情4 09年度美術館調査』を発行することができました。ご協力いただいた多くの美術館関係者のみなさまに、深くお礼を申し上げます。

「美術館について疑問に思ったことを、何でも徹底的に調べる」。この美術館調査は、ごくシンプルな目標設定から始まります。ですが、先輩たちが書いた報告書を読むにつれ、「もうネタがない」という悲鳴に近い声があがります。数字やグラフが満載の内容に「私には到底できない」と泣きつく学生もいます。それでも、少ない経験や興味のかげらを拾い集めるようにしてテーマを設定し、試行錯誤をくりかえしてアンケートを制作し、対象となる美術館に送付します。祈るようにして待ち続けた彼らにとって、「美術館から返信封筒が届いた!」という連絡は、自分たちの声に応えてくれる大人がいるという喜びの知らせでもありました。

4年間4冊の報告書を読み返すと、様々な変化が読み取れます。初年度の2005年当時、美術館に関するトピックのひとつが、指定管理者制度(2003年施行)であり、美術界では様々な議論が行われました。『わたしたちがみた当世美術館事情』でも、正解のないこの難題に学生が果敢に取り組んでいます。4年後、指定管理者制度は浸透し、この報告書の調査対象美術館一覧の「運営者」という項目には、官民さまざまな運営者が当たり前のように並んでいます。そして、今年は「美術館評価」が調査対象になりました。この「評価」も全国的にはまだ模索の段階であり、学生もとまどうことが多かったようです。

予算面での厳しさは一段と増えています。さらに、4年間で運営システムの議論から活動の「評価」へとフォーカスが移ったように、美術館の存在意義、人々が期待する美術館像が変わってきているようです。その中で美術館の努力は、本誌掲載の各調査でも取り上げられています。

さて、先輩たちの報告書を読むことから始まったこの調査は、本誌にも掲載されている「インターネット座談会」で終わります。ここに、今年は「美術館は本当に必要?」という石を投げ込んでみました。波紋は幾重にも広がります。

「ハコモノ行政でできた美術館は、修理費や改装費もない現状。中途半端な美術館は整理した方がいい」と冒頭から厳しい意見が出ました。その後、「思い出がある」「観光産業のひとつ」「働いている人が困る。私たちの就職先は?」といった、美術館を擁護する意見が続きました。さらに「美術館は変化すべき」「国立など大きな美術館に予算も人材も集中させて、残すに値する作品だけを収集すればいい」といった統合案がでると、「地域の個性も大事ではないか」「国や大きな団体に文化や未来をまかせていいのか」といった逆方向へふれます。

「考えがいろいろ揺らぐ」と素直に書き込む学生もいました。学生が未熟なのではなく、こうした“揺らぎ”こそが今の私たちに最も大切なことではないでしょうか? 昨年(2009年)、日本ではショーのように刺激的な事業仕分けが行われ、「効果」「成果」といった大義名分で文化予算はみるみるうちに削り取られていきました。予算削減という目的に邁進する仕分け人に、当然のことながら“揺らぎ”はありません。

“揺らぎ”の果てに、次のように書き込む学生が現れます。「作品の見方が様々なように、“人々の望み”も様々でないか。今の美術館はそのことを考えることが必要なんじゃないか。そして、私たち自身も何を望んでいるのかを考えなくてはいけないのだと思う」。

この時、彼らは調査者という第三者の立場を踏み越え、「私たちが美術館の未来を担う当事者である」という自覚をしたのだと思います。未来とは、彼らがこれから生きていく社会でもあります。

「美術館について調べる」という単純な課題を通して、学生たちは変わりました。ギブアップ寸前だった学生も、自信と謙虚さを持って社会に一步を踏み出そうとしています。これほど成長させる何か、美術館にはあるのだと思います。

あらためて、この調査にご協力いただいた美術館関係者のみなさまにお礼申し上げます。今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。